ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　十分後、雅也と良助は向かい合う。そして、同時にモンスターボールを構えた。

「試合開始！」

　審判の拓馬の声が二人の耳に届いた瞬間、二人は手に持ったボールを投げる。

「ピチュー、ゴー！」

「オーダイル！」

　その声と同時に、二匹のポケモンが現れる。雅也の方は、ちっちゃな黄色い電気鼠。対して良助の方は、赤い鶏冠と背びれのついた、大型の青い鰐だ。四つん這いになって出てきたそいつは、ピチューを見るやいなや、後ろの二本の足で立ちあがる。大きさの差は、歴然だ。だが、オーダイルの目に、油断は無い。もう何度もピチューと戦っているオーダイルは、彼の強さをよく分かっているからだ。

「オーダイル、アクアテール！」

　良助の指示に、オーダイルは、その巨体に見合わず素早い動きでピチューの背中に回り込む。そして、青く光った大きな尻尾を、真横に振る。

　だが、ピチュー飛んでそれを躱した。その瞬間、雅也の指示が飛ぶ。

「ボルテッカー！」

「オーダイル、地面だ！」

　着地直後に電気の塊となって突っ込んでくるピチューを見ても焦ることなく、良助は叫ぶ。オーダイルは、腕を地面に叩きつけて、大量の土を巻き上げた。視界が遮られ、ピチューは一旦スピードを落とす。

「冷凍パンチ！」

　良助の声と共に、いつの間にかピチューの後ろに回り込んでいた――土を巻き上げた瞬間、穴を掘るで、地面に潜り、ピチューの背後をとったのだ――オーダイルの、水色に光った右腕が振り下ろされる。

　しかし、冷凍パンチがあたる瞬間、ピチューは一歩後ろに引いて、オーダイルの懐に入る。そこでターンするのを感じた時、オーダイルの目が、驚愕で大きく見開かれた。

「雷パンチ！」

　オーダイルは自分の腹に、拳が痺れるのを感じた。片足がぐらつき、少し仰け反る。

「オーダ――」

「もういっちょ！　ボルテッカー！」

　続いて、さっきより大きい衝撃を腹に感じて、オーダイルはそのまま仰向けに倒れ、気絶した。

「……よくやった、オーダイル。戻れ」

　良助はそう呟きながら、オーダイルにモンスターボールの開閉スイッチを向ける。赤い光がオーダイルを包み込み、あっという間にボールの中へと姿を消した。

「エイパム！」

　そして、続いて別のモンスターボールを投げた。中から出てきたのは、尻尾の先がまるで手のような形になっている紫色の猿のようなポケモン、エイパムだ。

「よし、ピチュー。いったんボールに――」

「逃がすか！　エイパム、追い打ち！」

　雅也がボールをピチューに向け、赤い光が体を包み込んだ瞬間、エイパムの長い尻尾がピチューにぶつかる。小さな爆発音と共に、ピチューは吹っ飛び、近くの木に激突して気絶した。

『追い打ち』という技は、交代間際にタイミングよくぶつけると、威力が倍加する技である。

「やるね……よくやった、ピチュー」

　今度こそ、ちゃんとピチューをボールに戻した雅也は、そう呟く。そして、新しいボールを出し、それをちょっとの間見つめて、コクンと頷く。ボールの中のポケモンも、同じように頷いた。

　雅也は、そのボールを前に投げる。

「フシギダネ、ゴー！」

　出てきたのは、蛙に似た、背中に大きな植物の種を背負ったポケモンだ。薄い緑色の体には、濃い緑色のまだら模様がついている。

　このフシギダネは、雅也達の命の恩人だ。あの時崖から落ちたとき、たまたま崖の途中にある洞窟の入口付近で、木の実をお手玉にして遊んでいた、そしてとっさとは言え、見知らずの人間を助けようという心を持っていたこのポケモンがいなければ、雅也達はとっくに死んでいただろう。背中の種以上に、丈夫な蔓が特徴で、その蔓で落ちてくる雅也達を絡め取ったのだ。無論、その時のフシギダネは、さぞ冷や汗をかいただろうが。

　助けられた雅也達一人と二匹と、あっという間に仲良くなったフシギダネは、何と道場までついて来た。それでめでたく、フシギダネは雅也の手持ちに加わったというわけだ。

「タネマシンガン！」

　雅也がそう叫ぶと、フシギダネは背中の種から、小さな種を無数にエイパムに向けて放つ。

「エイパム、アイアンテール！」

　だが、当たる瞬間、エイパムの尻尾が光り、鉄のように硬くなる。エイパムはそのまま尻尾を振り回して、カンカンという音と共に飛んでくる種を次々に撃ち落とした。

「まだまだ、もういっちょ！」

　指をパチンと鳴らし、雅也はそう叫ぶ。一旦はやんだタネマシンガンが、もう一度エイパムに放たれる。

「へっ、無駄だ！　アイアンテール！」

　得意顔で叫ぶ良助。エイパムも同じような顔で、再び飛んでくる種を次々に撃ち落としながら、どんどんとフシギダネに近づいていく。その時だ。

　飛んできた種のいくつかから、芽が出てきた。芽はどんどんと成長し、やがてエイパムの手や足、そして尻尾に巻き付き、動きを封じていく。

「なっ、宿り木の種かっ？」

　これは、良助の声である。今度は、雅也が得意そうな顔をしていた。さっき指をパチンと鳴らしたのは、タネマシンガンの中に宿り木の種を混ぜる合図である。まだ誰にも言っていない、雅也とフシギダネだけの秘密の合図だ。

「今だ！　蔓の鞭！」

　雅也の指示と共に、フシギダネの背中から、蔓――この蔓が、雅也達の命を救ったのだ――が伸びて、エイパムに叩きつける……というよりは、槍のようにつき刺す感じでエイパムに勢いよくぶつける。エイパムは吹っ飛んで、木に当たって気絶した。

「むぐっ……よくやった、エイパム。戻ってこい」

　何とも言えない声を出した良助だが、すぐにエイパムをボールに戻す。そして、最後の一個を取り出した。

「バルキー！」

　出てきたのは、ピンク色に近い体の、人型のポケモンだ。頭に先が角張っているツノのようなものが、三つ縦に並んでいる。

「よし、もう一発、蔓の鞭！」

　さっきみたいに『追い打ち』でやられないために、雅也はそのままフシギダネでバトルを続行。フシギダネは今度は、蔓を真上から振り下ろす。

　バルキーはそれを見ても、身じろぐことなく目をつぶって仁王立ちしていた。なんとなく、このまま振り下ろすのは危険だという予感がした雅也は、慌てて『蔓の鞭』を止めようと口を開く。

　だが、時既に遅し。

「バルキー、受け止めて叩きつけろ！」

　今まで仁王立ちしていたバルキーは、良助の声で目を見開き、振り下ろされる蔓を、肩のあたりで受け止め、そのまま思いっきり引っ張る。あっという間に空中に放り投げられたフシギダネは、為す術もなく、さっきエイパムがぶつかった木に頭から衝突し、そのまま目を回して気絶し、ズルズルと落っこちた。

「なっ……ふ、フシギダネの仇討ちだ！　リオル、ゴー！」

　フシギダネをボールに戻すと同時に、雅也も最後のボールを投げる。出てきたリオルは、地面に着地すると同時に、そのままバルキーに向かって走る。

「電光石火！」

「バルキー、止めろ！」

　だが、良助のその声がバルキーの耳に届いた頃には、既にリオルはバルキーに密着する位置で、砂埃を上げて急ブレーキをかけていた。それにバルキーが気づいたのは、既にリオルを止めようと両腕を前に突き出していた後だった。もう、リオルは腕と腕の間に潜り込んでいる。

「やっば……」

　リオルはそのまま、右手をバルキーの体に当てる。

「はっけい！」

　そしてそのまま、その手を真横に勢いよくスライドさせる。バンっという音が鳴り、衝撃波が起こる。

　そのままバルキーは、後ろに倒れた。

「バルキー、気絶！　勝者、青柳雅也！」

　審判を務めていた拓馬の声が、そう響いた。